

事業委員会

第10回 技術フォーラム

「さらなる飛躍のために Part II ～魅力的な技術士会活動を考える～」

川 浦 広 樹

はじめに

2012年(平成24年)2月22日(水)13時30分～17時に亘り、ホテル札幌ガーデンパレス札幌2F丹頂の間(札幌市中央区)において、第10回技術フォーラム「さらなる飛躍のために Part II ～魅力的な技術士会活動を考える～」が開催された。

技術フォーラムは、技術士会会員にCPDの機会を提供するとともに、会員の自由な意見交換の場を設けることを目的として年1回開催されている。今年、「公益社団法人 日本技術士会北海道本部」としての新たなスタートであるとともに、「技術フォーラム」も第10回目とひとつの節目を迎えた。



写真1 能登副本部長の開会挨拶

1. フォーラムの目的と概要

日本技術士会北海道本部では、所属する会員各々が自主的に技術士の社会貢献、技術研鑽の為の様々な委員会・研究会活動を行っているにも関わらず、技術士会会員全体に、これら委員会・研究会の活動内容があまり詳細に知られていないのが現実である。

そこで、技術士会活動をより充実した魅力的な活動に発展させることを目的に、北海道本部の委員会・研究会等が一同に会して、各会の、①活動の趣旨、②活動の内容、③今後の活動方針等の報告とともに、パネルディスカッションを行い、同じ志を持

表-1 フォーラムの概要

総合司会：「第10回技術フォーラム」実行委員		荒 精一
1 開会挨拶	日本技術士会北海道本部 建設・総監部門	副本部長 能登 繁幸
2 委員会・研究会発表		
①防災委員会	建設部門	小林 正明
②青年技術士交流委員会	農業・総監部門	田中 真也
③地域産業研究会	農業・総監部門	伊藤 恒男
④北方海域技術研究会	建設・総監部門	大塚 夏彦
⑤リージョナルステート研究会	建設・総監部門	大谷 高志
⑥技術交流研究会	応理・総監部門	金 秀俊
⑦倫理研究会	建設・総監部門	花田 真吉
⑧北海道スタンダード研究会	建設部門	樋詰 透
3 全体討論	司会 建設・総監部門 司会 応理・建設・総監部門	荒 精一 五十嵐敏彦
①防災委員会	建設・総監部門	高宮 則夫
②青年技術士交流委員会	農業・総監部門	田中 真也
③地域産業研究会	農業・総監部門	伊藤 恒雄
④北方海域技術研究会	建設・総監部門	大塚 夏彦
⑤リージョナルステート研究会	建設・上下水道部門	武智 弘明
⑥技術交流研究会	応理・総監部門	金 秀俊
⑦倫理研究会	建設・総監部門	花田 真吉
⑧北海道スタンダード研究会	建設部門	樋詰 透
4 閉会の挨拶	日本技術士会北海道本部	副本部長、事業委員会委員長 上下水道・総監部門 中野 淑文
5 意見交換会 真珠の間(4階)		

つ会員に広く参加を促した。本フォーラムに対し、総勢 66 名の参加があった。

2. 委員会・研究会発表の概要

(1) 防災委員会

平成7年の阪神・淡路大震災を契機として日本技術士会の全国本部に先駆けて発足した。防災型国土のあり方について提言するなどの活動を行っており、現在は、「東日本大震災を教訓とした北海道の防災」に関する今後の活動方針や提言書編纂の考え方(案)に取り組んでいる。

(2) 青年技術士交流委員会

45歳以下の若手技術士を中心にした委員会で、研修会(北の技術)、テクニカルスクール、テクニカルツアー、「学校へ行こう」(JABEE 支援)、EPO の

管理、全国青年委員会との連携など、幅広い活動を行ってきている。今後は、公益法人化に対応した各活動の再認識及び強化、若手技術者が参加しやすい環境づくり(若返り)について取り組んでいく。

(3) 地域産業研究会

これまで見逃されてきた地域資源の発掘、それを活用した地域振興や地域産業の可能性の提言等を研究目的として設立された。食の討論会や現地見学会などの他、エゾシカ分科会、地域活性化分科会、資源・環境・健康分科会などの個別課題への取り組みも行っている。今後は、食産業研究会(仮)、エゾシカ研究会(仮)を設立するなど新たな活動を計画している。



写真2 フォーラムの会場

(4) 北方海域技術研究会

北海道周辺海域の利用と保全および沿岸地域社会に関する技術分野をフィールドとし、確実・有意義な技術社会の構築を使命と考え、講演会・視察会及び地域との交流を通じ、会員専門分野の資質向上、議論展開等を図ってきた。現在は、活動に関わる会員拡大、社会貢献に繋がる活動展開を課題とし、公開討論会や漁港地域再編に関する討論サロンの開催、活動年報の作成に取り組んでいる。

(5) リージョナルステート研究会

北海道の自立と活性化を進めるために技術士が何か貢献できないか、やれることから実行してみようという問題意識からスタートした。自然科学教育分科会、循環技術システム研究分科会、地域主権分科会の3つの分科会による定例会と、出前授業、施設見学会など、外部に目を向けた活動を実践している。エンジョイサイエンス研究会の独立など新たな活動にも取り組んでいる。

(6) 技術交流研究会

技術士の技術的研鑽を目的とした専門分野横断型の研究会として、主として機械・金属など会員の少ない部門の有志が相集い、自主的に勉強をしようと1986年に始まった。「技術士の自己満足」を避けるべき、会員以外の大学等の研究者にも講演をお願いして鋭意に専門以外の技術の吸収を図っている。

(7) 倫理研究会

コンサルタンツ北海道100号特集に能登副本部長が発表した論文「今、技術者に求められるもの～倫理と誇り、そして責任～」が研究会発足の引き金である。「専門技術は公衆に理解されにくい。故に倫理と誇り、そして責任を持たねばならない」という論旨に賛同し、「倫理とは？」について議論し、事例研究を行い、自分なりの「ベストプラクティス」を考えるという活動を行っている。

(8) 北海道スタンダード研究会

北海道らしさ、北海道人の考え方や気質等を分析し、北海道のあるべき姿や北海道の自立・発展につながるような幅広いテーマで議論を交わしながら、「魅力・価値の創造」、「ハンディの克服」、「独自性の創出」の3つの柱に沿って、「北海道が元気になる」提案やルール作りと発信、さらに北海道の明日を担う人材の育成を目指した活動を展開している。



写真3 発表風景

3. パネルディスカッションの概要

各委員会・研究会の報告を下地に、各会代表者と参加者全員で技術士の「さらなる飛躍のために」に繋がる諸活動のあり方について討論を行った。

司会(五十嵐技術士)から、前回の第9回フォーラム(テーマ:徹底討論!!『THE 技術士』～さらなる飛躍のために)では、「知名度の向上+社会貢

献+さらなる飛躍(現状打破)のために何をすべきか?」について討論を行い、①技術に根付く一方通行ではない**外向け**の活動、②一般市民に向けた継続的で有効な**情報発信**、③技術上のネットワークや技術士の**組織**による対応が重要という指摘を得たことの説明があった。

その上で、今回の討論では、研究会活動が「社会に役立ちたいという個人のモチベーション」に拠っており、活動環境・活動条件の整備や活性化については、「個人や研究会のモチベーション向上とその維持を軸に検討されるべき」との提案があった。



写真4 パネルディスカッション風景

(1) どんな活動環境が求められているのか

現在の活動を基本として、研究会活動への参加のしやすさ、参加者の募集方法などの活動環境について討論を行った。

- ・若手などの担い手が不足している。集まる時間を就業時間外にするなど、多忙な業務の中で会社や仲間の理解を得て委員会・研究会活動に参加しやすい環境づくりをすることが必要である。
- ・研究会での研究目的が曖昧になってきている。
- ・若手を育成する場としての問題提起やセミナー等での興味深いテーマの設定が必要である。

(2) 新規メンバーの参加について

組織体制が多重化構造になってきていることや会員の高齢化・固定化が進んでいるなどの現状課題が確認された上で、設立時メンバーの思いを基に継続活動してきている「研究会にとって後継者は必要か」、「その後若い人の入会が必要か」という課題に対して意見が交わされた。

- ・「4年間で成果を出す」という期間限定の研究会があるなど「テーマが決まっている研究会」と「テ

マを変えられる研究会」があるため、研究会の目的によって若い後継者の必要性が異なる。

- ・研究会への参加動機を高めるためには、一次試験合格者祝賀会などでの勧誘、研究会活動で得られる社会貢献、自社活動への貢献、自己研鑽も含めた人材交流のメリットなどを強調していくことが必要である。
- ・後輩を連れて行くなどのきっかけづくりの場を増やすことが必要である。
- ・情報を外に出して活動の魅力を周りへ伝えていく努力が必要である。
- ・組織の硬直化などにより王国を作ってしまったことで新たな人が入りにくい環境がある。
- ・研究テーマが固定であるため先人がいることにより入りにくい状況がある。
- ・新たなテーマを数年単位で設定し募集していくことが必要である。

(3) どんな活動が社会に求められているのか、社会貢献につながるのか

- ・社会貢献は、大げさに考える必要はなく、普段我々がやっている日常的な活動を継続していくことが大切である。
- ・技術士の知見を活かし、市民との関わり、他業界との関わりを高めていくことが社会認知に繋がる。
- ・実務内容を伝える教育支援、科学技術者としての専門家判断を必要とする場への参画が重要な社会貢献となる。
- ・新たな技術士や市民に技術士会の活動が知られていない。技術士会は、村社会の中でこそこそやっている感じがある。村社会からの脱皮が必要である。
- ・まずは発信が必要であり外に向かって技術士会についての宣伝をしていく。
- ・市民目線でしっかり活動をして、薄れている科学技術者への信頼を回復していくことが求められている。
- ・情報発信に関しては、他業界や商工会議所のエコピープルネットワークに、研究会活動のテーマ発信を行っていくことにより新たな可能性が創出される。

(4) 研究会活動の活性化に向けた今後のあり方

司会(五十嵐技術士)が、自らの作成資料「研究会活動活性化への私の提案」(表-2)を発表し、その内容を参考に今後の研究会活動の活性化に向けて、意見交換を行った。

- ・ 内向きに関しては、テーマを継続していくなど一人一人のモチベーションを絶対下げない工夫、さらに上げていく工夫が極めて重要である。また、モチベーション向上には組織体制にもよるが、委員・役職の任期制限などの取り組みも含まれる。
- ・ 地方のあり方に関する提言、研究会活動報告については本部に対する内向き主体ではなく、外向きにしていく必要がある。
- ・ 非本部会員でも CPD の機会づくりとして会合出席できる仕組みづくりや研究会活動のコストパフォーマンス、ベネフィットを伝えていくことが必要である。
- ・ 食料自給率が高い北海道産業の東南アジアでの今後の活動が求められている中で食に関する提案を行っていく。
- ・ 研究会活動の進展の中で北海道を知り、自ら考え、自ら活動し、自ら結果を出す人材の育成に努める。
- ・ 成果を求める研究会とは異なり第一線から一步引いた世代の人達が気軽に参加し CPD 取得を目指す研究会も必要である。
- ・ 外向きに関しては、市民に向けてのセミナー開催など市民の中での活動を継続し、市民の参加費を無料にするなどの参加しやすい環境づくり、地域との交流機会を創出する現地見学会の開催などにも取り組み、一般市民向けに PR できる場とする。
- ・ 各研究会活動をタイムリーに外向きに発信するには今の広報誌では困難であり、幅広い広報には別な発信ツール、制度、方法が必要である。ただ、参加無料の講演会を大学に働きかけているが、結果が出ていない現状もある。
- ・ 研究会設立・廃止ルール of 明確化が必要である。研究会廃止時の手続きが大変であり、そのことが新たな研究会設立を少なくしている要因の一つである。設立申請基準より継続申請基準を厳しくするなど廃止手続きの簡素化が求められる。廃止

表-2 「研究会活動活性化への私の提案」概要

<p>1. 成果の公表や情報発信に対して</p> <p>1-1 技術士会内への内向きに</p> <p>① コンサルタンツ北海道や PE への投稿・報告を活動の中で義務付け(活動報告ではなく現在進行形の内容を周知し新たな知恵を求める目的)</p> <p>② 技術フォーラムでの活動報告の義務付け</p> <p>③ HP での活動内容の公表(検索でヒットしやすいキーワードに広報委員会で改変するなどの取り組みが必要)</p> <p>1-2 行政や一般市民などへの外向きに</p> <p>① 書籍の発刊と一般への販売。書籍が外向けへの有効なツールになるが出版に向けての資金が大変。外向けの出版については、出版基金(出版局)の創設が対応することも必要となる。</p> <p>② 提言報告書の無償配布(行政・各級議員向け) ⇒ 出版基金(出版局)の創設</p> <p>③ 新聞・テレビ・記者発表などメディアの活用 ⇒ 道本部事務局および研究会幹部対応</p> <p>④ 外向けのシンポジウム開催や既往シンポジウムへの技術士研究会名での意見表明などの積極的な対応がとれないか?</p> <p>2. 会員勧誘や研究会の拡大</p> <p>① 会員名簿の公表と活用 ⇒ 統括本部対応</p> <p>② 技術士・士補合格祝賀会での新規会員の勧誘(総務委員会対応の改善)</p> <p>③ 技術士外会員の積極的勧誘? ⇒ 技術士比率の明確化(予算付けのためにも)</p> <p>④ 研究会運営に関する研究会同士の交流会</p> <p>⑤ 研究会活性化のための意見交換会などを定期的に行っていく。</p> <p>3. 研究会の設立・廃止のルールの明確化</p> <p>① 設立申請・認可の手順を公表</p> <p>② 認可基準の明確化と公表</p> <p>③ 廃止基準の明確化と公表</p> <p>容易に廃止: 設立も廃止もエネルギーが要る 特に活力が低下した廃止時に簡単に廃止できるルール必要。</p>

ルールの簡素化・継続に関する審査の重点化が必要である。

おわりに

今回の第 10 回技術フォーラムは、技術士会各委員会・研究会の魅力的な技術士会活動とはどうあるべきか考えさせられるフォーラムであったと思う。各会の活動が会員の固定化などにより硬直状況にある反面、新たな研究会の創出などの動きもある。

本フォーラムでは、技術士が社会に対し貢献できる場としての会活動の魅力を内的・外的に広報し、技術士が活動しやすい会づくりについての認識が深められたと感じている。今後も技術士会の各会活動が活発化し、各技術士が魅力をもって会活動に参加できるようになれば幸いである。

川 浦 広 樹(かわうら ひろき)

技術士(建設/総合技術監理部門)

株式会社 豊水設計
代表取締役専務
e-mail kawaura@housui.co.jp

